

今日の福音には、十二年もの間苦しめられてきた病気を癒された女性に向かって、「あなたの信仰があなたを救った。」と言われるイエスのみことばが響いています。また、死にかかっている娘のために、イエスの来訪を願った会堂長のヤイロに向かって「怖れることはない。ただ信じなさい。」と言われるイエスのみことばも耳にしました。これらのみことばから、今日の福音で語られている物語の全体を、「信仰」あるいは「信じる」ということに焦点をあてて味わうことも出来ます。しかし、今日の福音を第一朗読の知恵の書のことばや、答唱詩篇で歌った詩篇のことば、それに今日のミサの祈願のことばと併せて味わうなら、今日のミサ全体の流れの中でわたしたちが味わうべきもう一つの大きなテーマとして、「いのち」ということについて思いめぐらしてみることがあることに気づくと思います。そうすることによって、私たちが信じる信仰が何を求める信仰であるのか、あらためて思いめぐらしてみたいと思います。

第一朗読の知恵の書は、「神が死を造られたわけではなく、いのちあるものの滅びを喜ばれるわけもない。生かすためにこそ神は万物をお造りになった。」ということばで始まっています。旧約の神の民がたどった長い苦難に満ちた歴史の末に、異国の地で生きざるをえなかった神の民の末裔たちが必死に守り通した、いのちの創造主である神への信仰のことばです。異国の地で暮らさざるをえない彼らを取り巻いていたであろう周囲の暗い状況にもかかわらず、このことばには彼らを取り巻く暗い現実を跳ね返す、いのちの創造主である神への信仰に基づく不屈の楽観性が感じられます。

しかし、いのちの創造主である神への信仰を、自分たちの神の民としてのアイデンティティーの要として生きる者たちも死を経験しないというわけにはゆきません。それどころか、多くの悲惨な死を過去の歴史において体験してきた神の民は、聖書に収められた預言者たちのことばが朗読されるたびに、大きな嘆きの中で、自分たちの祖先が経験した悲惨な過去の歴史と、その結果としての自分たちの今の苦難に満ちた状況は、神の民として生きるはずの、自分たちの主なる神に対する罪の結果であると告白し、このような自分たちの状況からの救いを嘆願して祈り続けたのです。そしてその祈りは、この世に死をもたらした悪魔の支配からの解放を願う終末論的な期待を、つまりこの世の悲惨な歴史の果てに、罪と死をもってこの世を支配する悪魔の力を決定的に打ち破って、全てのものにいのちを与え、万物を生かすためにお造りになった創造主である

神の支配が決定的に実現する、神の新しい創造のみわざへの期待を育んで行ったのです。

ナザレのイエスは、このような人々の神の救いに対する待望の中に、人々の救いへの待望を担って歴史の中に登場されたのです。福音書が語るイエスの数々の奇跡の物語は、ナザレのイエスこそが人々が待ち望んでいた、死をもたらす悪魔の支配を打ち破って、死の支配するこの世界に新たないのちの可能性を開く、神から遣わされた神の子、救い主、メシア・キリストであることを語ろうとしているのです。

今日の福音には、そのようなイエスに近づき、イエスの前にひれ伏す二人の人が登場します。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」会堂長のヤイロはそう言って、しきりに願ったのでした。「この方の服にでも触れれば癒していただける。」十二年もの間、つらい病とその病ゆえに人々の偏見に苦しめられたあげく、今、貧困のどん底で死ぬよりもつらい日々を生きざるをえない、一人の女性は、ひたすら癒され、救われることを願ってイエスの衣の裾にすがるのでした。

「あなたの信仰があなたを救った。」癒された女性に向かってイエスはそう言われます。この女性の信仰は何を信じる信仰、何を願っての信仰だったのでしょうか。「怖れることはない、ただ信じなさい。」娘の死の知らせを受けたヤイロに向かってイエスはそう言われます。この期に及んで、イエスがヤイロのうちに奮い立たせようとされる信仰とは、何を願っての、どのような信仰であったのでしょうか。言うまでもなく、死の支配に脅かされているこの世界にいのちの創造主である神からの新たないのちの道を切り開かれた、いのちの主であるお方へのひたすらなる信仰です。

ここに集っているわたしたちは皆、洗礼によって復活の主のいのちをこの身に受けた者たちとして、今日の福音に登場するあの二人の人の信仰を受け継ぐ者たちです。そのようなわたしたちにイエスは、今日、何を求めておられるのでしょうか。「あなたの信仰があなたを救った。」イエスにそのように言うに足る、いのちの主であるイエス・キリストへのひたすらなる信仰、それによって、いかなる状況に置かれてもいのちへの希望を失うことのない不屈の信仰を今日の福音の二人のようにわたしたちの中に深め、そのいのちの主へのわたしたちの信仰を、死の支配の下にあるわたしたちを取り巻く社会に向かって宣べ伝えて行く力を願いたいと思います。

そのためにも、今日のミサが終わって家に帰ってから、今日のミサの中で歌

われた答唱詩篇のことばをもう一度ゆっくりと味わうことが出来たらと思います。繰り返しの答唱句で私たちは声を合わせて次のように歌いました。

神はわたしを救われる。そのいつくしみをたたえよう。

そして、祈りのうちに、今日の詩篇のことばが美しく響くのを聴きました。

神よ、あなたはわたしを救い、死の力が勝ち誇るのを許されない。

神よ、あなたは死の国からわたしを引き上げ、危ういのちを助けてくださった。

滅びは神の怒りのうち、いのちは恵みのうちにある。夜は嘆きに包まれても、朝は喜びに明けそめる。

神よ、いつくしみ深くわたしを顧み、わたしの助けとなってください。

あなたは嘆きを喜びに変え、荒布を晴れ着に変えてくださった。

旧約の人々が歌ったこの神への信仰の歌を、教会は亡くなられた方の通夜や葬儀の時に歌います。神のもとに召された愛する人が、神のみもとでこの詩篇の歌を天使や聖人たちに囲まれて歌っていることを信じて、私たちは悲しみの中でこの詩篇を歌います。神のもとに召されたその方が、神のみもとで歌うこの詩篇の歌が、この世の悲しみの中に取り残された私たちを励ましていることを感じながらこの詩篇の歌を歌います。

今日のミサの中で歌ったこの詩篇の祈りが、私たちの今日を支え、私たちの明日を開く祈りとなることを願って、耳に残っているこの詩篇の祈りに包まれて今日のミサをおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高